

精神障害者の地域での生活を考える ～当事者を困んで～

夏の暑さが戻り、汗ばむ9月15日に第159回障害者地域生活支援研究会が開かれました。今回は精神障害当事者の方4名をアシスト213階 障害福祉センターのADL室に迎え、いつもと違う雰囲気スタートしました。



最初に、本日の発言者である竹内さん、川原さんが活動されている「ピアサポーター」について、浅野社会復帰センターの竹本さんから説明して頂きました。ピアサポーターとは、過去に精神科病院で長期入院をされ、現在は地域で暮らしている方が、入院している患者さんに、ご自身の経験を語る活動です。このことは、今入院している方が、退院して生活していくイメージづくりや、モチベーションを高めていく働きかけをするとのこと。そしてピアサポーターの活動は始まったばかりですが、この活動はピアサポーター、入院されている患者さん両方にプラスの影響を与えているとのこと。

引き続き、竹内さん、川原さんにインタビュー形式で、今地域で生活している現状等をお話し頂きました。お二人には「現在、どのような生活をしていますか?」「悩みは誰に相談しますか?」「これだけは伝えたいことは何ですか?」等々、退院して地域で生活している中での質問に答えてもらいました。困った時に相談する支援者は決まっているとのこと「決まった相談先があると安心する。」とのことでした。また、当事者の方に伝えたいことは、「この病気は自分の考え方で変わるので、くよくよして次の日に持ち越さない。必ず良いことがある。」「ベストをつくすこと。」そして、支援者に対しては「良き支援者になってください。」と締めくくって頂きました。



続いての発言者は、一般就労をされている藤島さん、上田さんです。北九州障害者居住サポートセンター 所長 佐藤さんの進行で「現在、どのような生活をしていますか?」「今の仕事は?」「仕事に就く前と後で具体的にはどんなことが変わりましたか?」「どんなところに、どんな相談をしていますか?」「周りの支援で助かったと思うことは?」等、お話し頂きました。その中で、お二人が地域で生活する上で、支援者は親と一緒に存在であり、心のよりどころになっているとのこと。そして支援者に対し「安心できる。感謝している。」「最善の手を打ってもらったので、こんなことをしてくれたらよかったのに、というような思いはない。」との言葉が印象に残りました。

その後には求職活動の際に障害があることを「伝える」「伝えない」かについて、再び発言者の藤島さん、上田さんにお話しを伺いました。それぞれメリット・デメリットがあり、どちらを選択するのか当事者の方としては迷うところですが、お二人は「障害のあることをオープンにして良かった。伝えておかないと、どこかで隠しているという気持ちの面で安心感がない。」「はじめは、障害者という目で見られるのではないかという心配もあり、抵抗があるかもしれないが、伝えずにクローズにしていると、仕事ができないことで、トラブルになることもあるので、伝えた方がいいと思う。」と話されていました。そして、働くことに対して戸惑っている同じ精神障害当事者の方に「働ける可能性があれば、働いた方がよい。金銭面、人付き合い等幅が広がる。」「色々葛藤があると思うが、目標を持って仕事をやっていたら、仕事が続くと思う。」とのアドバイスをお二人から頂きました。



最後に、北九州市精神保健福祉センター 中村さんから、「ジョブガイダンス事業」について説明して頂きました。この事業はハローワーク小倉と連携先の病院が行っている事業で、精神障害当事者で就職を希望される方に、就職や就職活動、及び就職準備に関する知識や方法を伝えるための講座を行っています。講座の中で就労を経験している当事者の話を聞く場面もあり、就職に向けて心強いものとなっているようです。

そして進行の黒岩さんから、障害の有無に関わらず、就労も含めた生活の中で、小さくてもいいので成功体験の積み上げが大切であるとまとめていただきました。

第152回の支援研ではデイケアサービスに通われる精神障害当事者の方にお話しを伺いましたが、実際に働いている方の話しも聞きたいとの声が聞かれ、今回の支援研が実現しました。

今回の参加者は44名。その内、13名の新規の方にご参加頂きました。



※こちらの議事録は北九州市障害者自立支援協議会のホームページでもご覧いただけます。
<http://kitakyushu-net.shien-c.com/>